

令和8年度自己評価計画案

いしかわ特別支援学校

目標 番号	重点目標	具体的取組	主担当	現状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考
1	各教科における指導力の向上 →チームによる授業研究とTTを生かした授業実践	① 授業づくりパッケージの実践を通して、昨年度検討した“教科を学ぶ意味”“児童生徒の行動を教科の視点でどのように見取るか”等複数の視点をもって、「教科でつきたい力」を教員間で協議・共有し、授業改善を行う。	研究研修課 情報課	授業づくりパッケージを活用した授業づくりは定着しつつあるが、指導案検討の段階から専門教科の教員が関わる体制づくりや、児童生徒の実態や段階に応じた指導内容と具体的な働きかけについての検討が不十分であった。また、授業場面では教科の視点を踏まえた支援や、児童生徒の学びの姿を教科の視点で的確に見取り評価することが課題である。	【成果指標】(教員) 授業の構想や検討の段階で、AI等を活用しながら「教科でつきたい力」「児童生徒の見取り」等、複数の視点で協議しチームで授業改善を行った。	授業づくりパッケージを利用し、AI等を活用しながら「教科でつきたい力」「児童生徒の見取り」等、チームで情報共有・協議し、授業改善ができたと回答した教員の割合は A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である 【達成目標 B 以上】	中間評価が達成基準に満たない場合は、取り組み体制を検討する。	9月と1月
	各教科における指導力の向上 →児童生徒が教科の見方・考え方を働かせるための問いと教材の工夫	② 授業づくりにおいて、児童生徒が教科の見方・考え方を働かせ、学びが深まるような問いや教材の工夫を行う。	教務課 研究研修課 GIGAスクール推進	教科の本質や見方・考え方に関する理解は深まりつつあるが、児童生徒が教科の見方・考え方を働かせている姿が具体的にイメージできていないため、教科の本質に迫るための問いや教材の工夫が不十分である。	【成果指標】(教員) 児童生徒が教科の見方・考え方を働かせ、学びが深まるような問いと教材の工夫を行い、授業実践した。	児童生徒の実態に応じて、教科の見方・考え方を働かせ学びが深まるような問いと教材の工夫を行ったと回答した教員の割合は A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である 【達成目標 B 以上】	中間評価が達成基準に満たない場合は、取り組み体制を検討する。	9月と1月
2	インクルーシブ教育の推進 →地域住民に対する本校教育活動の理解と交流の促進	① 児童生徒が地域住民と交流する機会を増やし、地域住民の声を反映したり、本校の教育活動を発信したりして交流を促進する。	進路課 さくらショップ運営委員会 各学部	これまで、さくらショップ等の販売活動や地域のイベントへの参加や出演、近隣の施設等の利用を行い、交流活動と本校の教育活動への理解促進を図ってきた。これまでの取り組みを見直し、一部の学部や学年の実践にとどまることなく、学校全体で積極的に地域との交流を図り、本校教育活動への理解や、インクルーシブ教育を推進していく必要がある。	【成果指標】(教員) 地域住民との従来の取り組みを改善したり、新たな交流を企画・実施したりすることで交流を促進する。	地域住民との従来の取り組みを改善したり、新たな交流を企画・実施したりして、交流を促進できたと感じた教員の割合は A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である 【達成目標 B 以上】	中間評価が達成基準に満たない場合は、取り組み体制を検討する。	9月と1月
	インクルーシブ教育の推進 →両校舎におけるインクルーシブ教育の実践	② 学部間交流や学校間交流、地域交流等の取り組みにおいて、年間指導計画に位置付け、ねらいを明確にして実践し、改善につなげる。	教務課 各学部 学部間交流推進委員会	学部間交流や学校間交流等を行う際、内容の検討や成果の確認などは、担当した教員が中心となって担う傾向がある。持続可能なインクルーシブ教育の実践を行うため、年間指導計画に位置付けることでねらいを明確にし、児童生徒の変容や成果を評価することで、内容の改善や実践を継続して行うことが期待できる。	【成果指標】(教員) 学部間交流や学校間交流、地域との交流活動を、年間指導計画に位置付け、ねらいを明確にして実践・評価し、改善につなげる。	学部間交流や学校間交流、地域との交流活動を、年間指導計画に位置付け、ねらいを明確にして実践・評価し、改善につなげることができた教員の割合は A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である 【達成目標 B 以上】	中間評価が達成基準に満たない場合は、取り組み体制を検討する。	9月と1月

目標 番号	重点目標	具体的取組	主担当	現状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考
3	<p>自立活動の指導の充実</p> <p>→自立活動の意義を踏まえた、的確な実態把握と目標設定による指導の充実</p>	① 児童生徒一人ひとりの実態、願いやニーズ等を整理し、教員間で共有、検討することにより、個に応じた適切な目標設定と支援を行い、自立活動の指導の充実を図る。	自立活動部 自立活動推進委員会	自立活動の実態把握や目標設定は担任が中心となって行っており、学年団や学習グループなど、児童生徒と関わる教員間での整理や共有が不十分な現状がある。また、目標を達成するための指導場面が限定されることもあり、指導の成果が表れにくい状況にある。評価しやすい具体的な目標設定や指導場面の設定を行い、指導の充実を図る必要がある	【満足度指標】(保護者) 自立活動の指導において、教員は児童生徒の実態に応じた目標設定と適切な指導・支援を行っていると感じている。	自立活動の指導において、教員は児童生徒の実態に応じた目標設定と適切な指導・支援を行っていると感じている保護者の割合は A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である 【達成目標 B 以上】	中間評価が達成基準に満たない場合は、取り組み体制を検討する。	9月と1月
	<p>自立活動の指導の充実</p> <p>→ICTや絵カード等を活用した児童生徒の参加と活動の向上</p>	② ICTや絵カード等の特性を生かし、児童生徒一人ひとりの実態に応じたコミュニケーション手段を選択するとともに、その支援方法を教員間で共有し、児童生徒の参加と活動の向上を進める。	自立活動部 自立活動推進委員会 情報課	児童生徒のコミュニケーション面での課題について、関わる教員間での情報共有が十分でないこと、重度重複障害のある児童生徒へのICT機器の活用が一部に留まっているという現状がある。また、視覚支援の必要性や効果的な活用方法について統一されておらず、児童生徒の参加と活動性を向上させるための工夫を教員間で共有して取り組む必要がある。	【成果指標】(教員) 児童生徒の実態に応じてICTや絵カード等の支援手段を適切に選択し、教員間で指導方法について共通理解を図り、児童生徒の参加と活動の向上を進めることができた。	児童生徒の実態に応じてICTや絵カード等の支援手段を適切に選択し、教員間で指導方法について共通理解を図り、児童生徒の参加と活動の向上を進めることができた。と回答した教員の割合は A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である 【達成目標 B 以上】	中間評価が達成基準に満たない場合は、取り組み体制を検討する。	9月と1月